

Title	地域の知識の伝承を目的としたウェブサイトの構築
Author(s)	古関, 克也
Citation	
Issue Date	2006-03
Type	Thesis or Dissertation
Text version	author
URL	http://hdl.handle.net/10119/585
Rights	
Description	Supervisor: 杉山 公造, 知識科学研究科, 修士

修 士 論 文

地域の知識の伝承を目的としたウェブサイトの構築

指導教官 杉山 公造 教授

北陸先端科学技術大学院大学
知識科学研究科知識システム基礎学専攻

450029 古関 克也

審査委員： 杉山 公造 教授（主査）
林 幸雄 助教授
本多 卓也 教授
下嶋 篤 助教授

2006 年 2 月

目 次

第1章	序論	1
1.1	研究の背景	1
1.2	研究の目的	2
1.3	本論分の構成	3
第2章	地域の知識伝承に関する事例	4
2.1	近年の事例	4
2.2.1	事例1 デジタルアーカイブ	4
2.2.2	事例2 図書資料の電子化、インターネット公開	5
2.2.3	事例3 GISによる地域情報共有支援	7
2.2.4	事例4 GISを用いた景観復元	8
2.2	本研究との相違点	8
第3章	自治体史、地形図の特徴とメディアの情報伝達特性	11
3.1	辰口町史について	11
3.2	旧版地形図について	13
3.3	メディアの情報伝達特性	15
第4章	ウェブサイトの構築	18
4.1	地域の知識の伝承に向けての課題と解決策	18
4.2	課題を解決するための機能	19
第5章	評価と考察	29
5.1	評価の方法	29
5.2	評価の結果と考察	30
第6章	結論	34
6.1	まとめ	34
6.2	今後の展開	35

謝辞	3 6
参考文献	3 7
付録	3 8

図 目 次

図 2.1	石川新情報書府	5
図 2.2	図解福井県史	6
図 2.3	さっぽろ文庫の T-Time による表示	7
図 2.4	島根県中山間地域情報センター	8
図 3.1	辰口町史	12
図 3.2	陸地測量部作成 5 万分の 1 地形図「鶴来」(明治 42 年測図)	14
図 3.3	図的メディアの利点、欠点	16
図 4.1	Web 辰口町史トップページ	18
図 4.2	辰口町時空間探索トップページ	20
図 4.3	地形図の表示切り替え	22
図 4.4	各自治区の年表	23
図 4.5	各集落の概要	25
図 4.6	自治区周辺の地理的変遷	26
図 4.7	文章からの地図の参照	26
図 4.8	伝説・昔話の一覧地図	27
図 4.9	辰口町の全体図	28

表 目 次

表 3.1	辰口町の構成・・・・・・・・・・・・・・・・	1 2
表 3.2	5 万分の 1 地形図「鶴来」の測図、修整年・・・・・・・・	1 4
表 4.1	表示地形図と表示年表の対応・・・・・・・・	2 2

第 1 章

序論

1.1 研究の背景

地域を取り巻く環境が深刻さを増す近年、地域に活力を取り戻すため、地域ブランドの創造などの地域振興への取り組みが盛んに行われている。ここで言う地域振興とは、単に地域が経済的に潤うためだけの動きではなく、地域のさまざまな価値を発見し、その価値による満足度を高めようという動きである[1]。時代が大きな転換期を迎え、社会の仕組みや暮らしが大きく変化しつつある現代において、魅力ある地域社会をつくっていくためには、地域に暮らす住民自身が自らの判断と責任で個性を活かした地域作りに取り組むことが大切である。住民が地域の魅力を自覚し磨き上げることによって、その地域を更に住みよくするための大きなきっかけになる[2]。

地域ブランドは、地域発の商品・サービスのブランド化と地域イメージのブランド化の相乗効果と好循環により、地域外の資金等を地域内に呼び込むことが焦点となる。地域ブランドに多く見られる実情として、どこにでもある商品にその地域の名前を冠したに過ぎないという例が多い。それぞれの味や品質が悪い土産品であった場合、それを購入した観光客は、その地域に対するイメージを大幅に低下させてしまう危険もある[3]。このように、地域の実情から外れた商品開発等がおこなわれてしまうと、地域振興にむすびつかないばかりか、負の効果さえ生む可能性がある。地域振興の計画を立てる際は、その地域の風土や文化を十分に理解した上で、地域の実態に適した戦略を練ることが求められる。そのためには、まずその地域とはなんであるのかという根本的なことから、その地域の住民があらためて問い直すことが第一歩である。しかし、例えば自身の出身地や居住地はどのようなところかと考え説明することは簡単

なようで難しい。自身ではわかっているつもりであっても、いざ出身地や居住地に関して問われた際、意外に回答が出てこないといった場面がよく見られる。

規模の大小、知名度の有無に問わず、全国の自治体には、町の基礎を形成する固有の歴史や風土が存在している。日本の国土の約 3 分の 2 は森林で、北は北海道、南は沖縄、平野部、山間部と様々な空間にコミュニティが存在する。石川県で考えた場合でも、能登地方、加賀地方、白山麓、沿岸部など、その地域構造は多様である。さらに辰口町はどうかというと、手取川沿い、丘陵のふもと、谷間の集落と、やはりその生活空間は様々である。したがって、地域にはそれぞれ特徴があり、先人が長い年月をかけて積み上げた固有の歴史、文化、伝統が存在すると考えるのが自然である。金沢市や仙台市のような自治体は、日本三大名園の一つ「兼六園」、毎年 200 万人以上の観光客でにぎわう「七夕祭」など強力な集客力を有する資源を持ち、「加賀百万石の城下町」、「杜の都」といったブランドイメージが全国的に浸透している。しかし、このような地域固有の資源や文化、イメージ等が、観光などを通じ地域の発展に大きく作用している自治体は全国でも一握りにすぎない。大部分の自治体は、地域に固有の特徴を有するにもかかわらず、その特徴を人々が知る機会は少ない。

ここで、全国に普遍的に存在する、地域の風土や文化を記録、蓄積した資料として、自治体史と国土地理院発行の旧版地形図を挙げたい。自治体史は、その地域固有の歴史や風土、伝統を後世に伝承すべく、全国ほとんどの自治体で編纂が行われている。自治体史は、地域に関するありとあらゆる出来事や、地域に伝わる言い伝え、文化、風土など、これからの地域を担う世代に残すべき知識が網羅されている。一方、旧版地形図は、明治後半からの測量成果として、明治後半から現代までの地形図が蓄積されている。地形図は地域の様々な情報が盛り込まれており、作成された当時の地域の形態や、地域の歴史的な成り立ちなど、その地域の特徴を知るための貴重な資料である。地形図は日本の国土全域を対象としており、自治体史も全国大部分の自治体が発行していることから、両者は普遍的な地域資料であると言える。

1.2 研究の目的

本研究では石川県辰口町（現能美市）を研究対象地域とする。何故かということ、辰口町は辰口温泉や美しい自然環境を有するが、必ずしも全国的に知名度があるとは言

い難い。前述の通り、全国で多くの自治体はこのような状況にある。そして辰口町には自治体史の辰口町版である「辰口町史」が存在するため、辰口町を対象として行った研究は全国多くの自治体においても応用可能であると考えられるためである。研究に先立ち、能美市立博物館にて聞き取り調査を行った。すると、自治体史の辰口町版である辰口町史は、その存在自体あまり知られておらず、一般に触れる機会は少ないことがわかった。また、世代が進むにつれ、人々の地域に対する関心が徐々に薄れつつあるということがわかった。背景で述べたように、地域の人々一人一人が自分の地域はどのような特徴をもつのか、どのような成り立ちで現代にいたるのかを問い直すことは地域の未来を作り上げるにあたって重要である。

こうした現状を踏まえ、本研究では全国に普遍的に存在する地域の資料である自治体史と地形図を「地域の知識」の宝庫と捉え、表出する機会に恵まれない地域の知識を誰もが気軽に獲得することができるような方法を、事例、資料の特徴、メディアの情報伝達特性をもとに検討する。そしてその方法をウェブサイト に具現化し、有効性を検証する。

1.3 本論文の構成

本論文は、本章で述べた背景、目的に対して次のような手順で展開する。

まず第2章で、インターネットを通じて地域の文化や資源を表現・公開する先行事例をまとめる。そして事例と本研究との相違点を挙げ、研究目的達成のための道筋を立てる。

第3章では、本研究で用いる資料の特徴と、メディアの情報伝達特性について述べる。

第4章では、第2章、第3章で述べた内容をもとに、研究目的達成のために課題となる個所をまとめる。そして課題解決の手段として構築したウェブサイトの機能とその意義についてまとめる。

第5章では、本研究で構築したウェブサイトに関する聞き取り調査をもとに、地域の知識の伝承について考察を行う。

最後に、第6章で本研究のまとめと今後の展望を述べる。

第 2 章

地域の知識伝承に関する事例

近年、地域の資源や文化、自治体史や文庫がインターネットで公開される場面が増加してきた。資料を電子化することで、物理的な資料では不可能な、様々な伝達手段を講じることが可能となる。本章では、このような事例を考察することで、本研究で目指すべき方向を探る。

2.1 近年の事例

2.2.1 事例1 デジタルアーカイブ

デジタルアーカイブとは、文書、文化財など、将来に保存する歴史的価値のある対象を、データベースなどのデジタル技術を用いて保存・蓄積されたものを指す。地域振興への応用としても注目が集まっており、地域の持つ独自の文化や芸能を様々な視点から蓄積したデジタルアーカイブを公開することで、地域の魅力を捉えなおすきっかけとなることが期待されている。

豊かな伝統文化が蓄積されている石川県では、懸命の保存の努力にも関わらず、時代とともに失われる貴重な文化資産を将来にわたって継承するため、文化のポータルサイト「石川新情報書府」を開設している（図 2.1）。石川新情報書府は、公募により選ばれた地元企業などが監修委員会の指導のもとにコンテンツを作成し、輪島塗、九谷焼、金箔などの伝統工芸、能楽、まつりなどの伝統芸能や、民話、杜氏の記録、音のデータベースなど多彩な作品が公開されている。



図 2.1 石川新情報書府

<http://shofu.pref.ishikawa.jp/index.php3>

石川県の文化における代表的な事柄が、「石川の伝統工芸」「加賀百万石文化」「石川のすがた」などテーマ別に分類され、それぞれ音声や動画など様々な表現形式によって表現されている。

2.2.2 事例2 図書資料の電子化、インターネット公開

福井県文書館では、福井県の歴史を知る上で重要な資料となる公文書・行政刊行物等を収集・保存し、インターネットで公開することで利用者の歴史研究、生涯学習の支援を行っている。ここでの大きな特長は、資料の目録をインターネットで検索することである。目録データベースを用いると、公文書、古文書、行政刊行物、写真、新聞記事等を検索することができる。また、図解福井県史（図 2.2）では、福井県史の目次の一覧が表示され、各タイトルをクリックすることで、その詳細を記したページへと移動できる。物理的に膨大な量の資料を電子化し、インターネット公開することによって、知りたい情報へのアクセス性の大幅な向上が見られる。



図 2.1 さっぽろ文庫の T-Time による表示

2.2.3 事例3 GISによる地域情報共有支援

GIS（地理情報システム、Geographical Information System）は、地理情報、つまりデジタル化された地図データと、地図上の地物や位置の持つ属性情報を統合的に管理、分析、表示・伝達するシステムで、行政・ビジネス分野を中心に応用されている。GISは、地域・分野・時期を横断した情報共有を地図上で直感的に行えることから、地域情報の共有を支援するシステムとしても注目を集めている。近年では、インターネットを通じてGISを使用することができるWebGISを応用した地域情報のポータルサイトが登場してきた。

島根県中山間地域研究センターは、地域の自然、文化、資源情報等を誰でも・どこでも・いつでも発信・閲覧することにより持続可能な地域運営に資すべくWebGISを公開している。ここでは、利用者登録を行うとユーザーは地域情報を写真つきで入力することができ、その結果がリアルタイムで地図上に反映される。自然、歴史、地域活動、文化など様々な分野別に地図が用意されており、入力した情報は直感的にわかりやすい地図上にポイントとして表示され、そのポイントをクリックすると入力した写真やコメントを閲覧することができる。



図 2.4 島根県中山間地域研究センター

<http://www.chusankan.jp/GIS/ChiikiDAS/MapConsole.asp>

2.2.4 事例4 GISを用いた景観復元

矢野[4]らは、歴史都市京都の町並み景観の復元を目的として、3次元GISとVRモデリング技術を用い、現在から過去へと溯ることのできるバーチャルシティーを構築している。ここでは、過去の航空写真や住宅地図等から過去の京町家の空間分布を判読し、その分布上に京町家の3次元モデルを配置することで、過去の町並みを再現した。1948年から1987年にかけての町並みの変化を、3次元モデルを通じて見ると、徐々に近代的ビルが立ち並び、京町家がビルの中に埋没してゆく様子が非常に良くわかる。また今後の展望として、神社・寺院、近代建築物など、さらにコンテンツを充実させ、インターネットを介してバーチャル京都をウォークスルーできるシステムへの展開を挙げている。

2.2 本研究との相違点

前章で述べたように本研究の目的は、どこにでも存在するにもかかわらず表出する機会に恵まれない地域固有の歴史や風土に着目し、全国に普遍的な資料である自治体史と旧版地形図を地域に蓄積された知識と捉え、特定の興味によらず誰に対してもわかりやすい形で伝承するための方法を探ることにある。

前節で紹介した事例は全て、物理的な資料や伝統工芸、地図や都市景観などを電子化することで様々な分野への効果的な応用を可能としている。また、2.2.1 から 2.2.3 の事例は全て、インターネット上に公開されており、2.2.4 でも今後の展望としてインターネット公開を挙げている。どこでも・誰でも・いつでも手軽に情報の獲得が可能なインターネットは知識伝承に大きな可能性を持つと考えられる。本研究においても自治体史と旧版地形図を電子化し、インターネットを介して地域の知識の伝承への可能性を探ることにする。そのために、どのような形で辰口町史と旧版地形図をウェブサイト内で組み立てるかが課題である。

2.2.1 でみられるようなデジタルアーカイブは、埋もれた地域の財を掘り起こすという視点は本研究においての課題とも重なる。ただ、現在存在する地域のデジタルアーカイブのウェブサイトは、都道府県単位のような大きなスケールの地域を対象としている場合が多く、市町村であってもある程度の規模を有する自治体において取り組まれている[5]。内容も、すでにある程度名の知れた資源や文化を取り扱う場合が多く、そのある程度名の知れた資源の価値をあらためて見つめなおすといった意味合いが感じられる。都道府県単位の場合、ある程度の知名度を持つ文化や芸能が取り上げられるとすると、そのような知名度を持つ文化や芸能が現段階で表出していない地域も存在するため、情報が空白の自治体が現れることが懸念される。本研究では、全国に普遍的に存在する自治体史と旧版地形図を用いることで、このような懸念を回避できると考える。

2.2.2 の福井県の事例では、自治体史や文庫を電子化し、ウェブ上で公開することで求める資料へのアクセス性の向上が見られた。ただ、目録データベースはキーワードを入力する必要がある。つまり、調べたいキーワードがなければ何もできないため、事前に調べたい事柄が明確に存在する場合に有効である。図解福井県史は、物理的な書籍のページをめくる作業がクリック一つに簡潔化されることで非常に読みやすくなったが、目次から知りたい情報を探し、本文を読むという本の構造はそのまま踏襲されている。この場合においても、やはり事前に調べたい事柄が明確に存在することが前提になるであろう。札幌市の事例に関しても、本を読むこと自体に関しては、読書支援ソフトウェアの様々な読書支援機能を用いることができるため非常に読みやすくなっているが、図解福井県史と同じく、目次の一覧から読みたい項目を選択し本文を読むという本の構造はそのまま踏襲されている。第1章で述べたように、本研究

においては、その地域の人であれば特定の知識や興味を持たない場合でも、誰でも気軽に読み進められるということが求められるため、目次から本文という構造を考え直す必要がある。

2.2.3 のWebGISは、地域の公共施設情報や自然災害時の危険区域や避難場所を示したハザードマップ等を住民に提供するため、多くの自治体で導入されているが、近年は島根県のような、地域情報の共有手段としての利用が増加してきた。地域情報の共有手段として用いる場合のWebGISの大きな利点は、地域の人々が共有する現実空間を射影した「地図」が主体となるため、現実空間をイメージしながら操作できることにありと思われる。2.2.4 では、2次元であった地図に高さを加え、立体の3次元とすることでさらに現実空間に近づけた。そして時間軸を加え4次元とし、過去へと溯ることで地域の変遷を、視覚を通じて感じ取ることができる。このことから、地図が地域の全体像や変遷を伝承する上で重要な役割を果たすことがうかがえる。ただ、2.2.3 の場合は、利用者が地図上に入力できるのは、写真と簡単なコメントのみであり、その場所で起こった様々な出来事を詳細に知ることはできない。2.2.4 も、視覚的に風景の変化がよくわかるが、その変化がなぜ起こったのかというような、事象の背景にある出来事まではわからない。次章で詳しく述べるが、地形図は明治後半から現在まで定期的に修整されつつ一貫して発行されつづけているため、明治から現代にいたる変化を視覚的に捉えることができる点で非常に有効であると考えられる。

第 3 章

自治体史、地形図の特徴とメディアの情報 伝達特性

前章で述べたように、本研究では自治体史（辰口町史）と旧版地形図を用いて、特定の興味を持たない場合であっても地域に関する様々な知識を得ることができるようなウェブサイトを構築したい。そのためにもまずは資料の特徴を把握する必要がある。そこで本章では、辰口町史と地形図の持つ特徴・利点・欠点と、メディアの持つ情報伝達特性を示す。

3.1 辰口町史について

石川県辰口町は、全身の山上村、久常村の一部、国府村の一部が合併し昭和 31 年 9 月 30 日に誕生した。そして平成 17 年 2 月 1 日、寺井町、根上町との合併により約半世紀に渡る歴史に幕を閉じた。地方自治体としての辰口町が存在した期間は約半世紀のみだが、灯台笹区では約 1 万 5 千年前の石器の数々が発見されており、他にも各地で遺跡が発掘されているように、辰口町域の歴史は大変長い。辰口町史（図 3.1）は、この辰口町域の歴史を様々な視点から分析・記録した史料である。



図 3.1 辰口町史

	主な内容	掲載年代
第一巻 自然民俗言語編	地形と地質、気象と災害、植物、動物、民俗、口頭伝承、辰口町のことば	通史
第二巻 前近代編	資料編：原始・古代、中世、近世 資料編：考古資料、古代史料、中世史料、近世史料	先土器時代（BC15000 頃）～明治 22 年
第三巻 近代編	行財政の推移、経済の動向、社会とくらし、教育と宗教	明治元年～昭和 31 年
第四巻 現代編	行政、経済、社会・福祉、教育・文化、長期計画	昭和 31 年～昭和 57 年
第五巻 集落編	辰口町内各集落の地誌 景観、沿革、産業、生活、展望など	通史
第六巻 続現代編	行政、選挙、財政、産業、北陸先端科学技術大学院大学、教育・文化・スポーツ、保健・福祉、環境、安心と安全	昭和 57 年～平成 17 年

表 3.1 辰口町史の構成

辰口町史各巻の構成を表 3.1 にまとめた。第 2 巻、第 3 巻、第 4 巻、第 6 巻は主に、辰口町域の歴史的事象の叙述で構成されている。第 2 巻は通史編として先土器時

代から近代へと至る地域の形成過程が叙述され、資料編として遺跡資料、文書史料が豊富に記録されている。第3巻、第4巻、第6巻は、明治元年から平成17年の辰口町閉町までのできごとを、行財政、産業、教育などに分類し、系統的な記録がなされている。第1巻、第5巻は歴史叙述的な記述方法はとられていない。第1巻は、辰口町の生活の根幹をなしている地形や植物、動物、民俗、方言などが科学的に分析され、網羅されている。第5巻は、辰口町域の34集落※それぞれについて、地形等の自然条件、地域の沿革、交通、産業などが系統的に記述されている。

安藤[6]らは、都道府県を対象とする地誌のもつ性格を、記述方法により、資料や数値の羅列的な掲載によるものを「記録性」、系統的項目立てと科学的分析によるものを「科学性」、トピカルな記述方法や写真等を効果的に用いたものを「大衆性」と分類している。都道府県を対象とした地誌（自治体史）と辰口町史は、対象スケールは異なるが、ともに一つの行政地域を対象とし、地域の地理的性格や歴史的背景が記録され、そして産業、行政、文化、自然等が系統的に構成されているため、この分類を辰口町史に当てはめて考えることも可能である。辰口町史は、時系列による歴史事象の系統的な記録と、地形、民俗、自然等の科学的分析、遺跡や文書等の史料の網羅的掲載が確認できるため、「記録性」、「科学性」を有する。しかし、その記録物としての性質上、記述は静態的であり、一般向けとしてはやや平板で、「大衆性」という意味合いは薄いと考えられる。

※現在の辰口町域の自治区数は38だが、辰口町史第5巻発行時点で、新興住宅地の「松が岡」「和光台」はまだ存在せず、「旭台」はこの当時閉村された状態であった。また、「緑が丘」は、辰口町史第4巻に詳しく記載されているため、第5巻には掲載されていない。

3.2 旧版地形図について

国土地理院発行の地形図は、国土地理院の前身にあたる陸地測量部が明治後期に初めて発行して以来、幾度も修正が繰り返され現代にいたる。辰口町域は5万分の1地形図「鶴来」（図3.2）の範囲に全域が収まる。この5万分の1地形図「鶴来」は、大正1年に明治42年測図の地形図が発行されて以来、現在平成4年発行の平成3年修

正の地形図まで発行され続けている（表 3.2）。

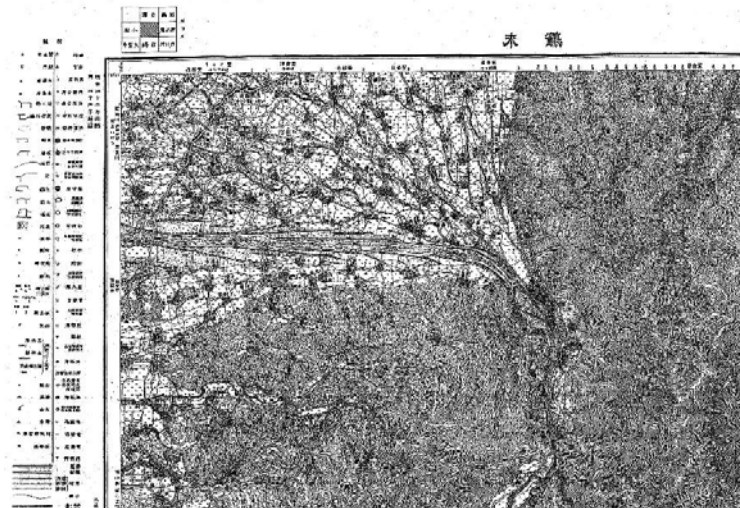


図 3.2 陸地測量部作成 5 万分の 1 地形図「鶴来」（明治 42 年測図）

明治	42 年
大正	5 年 15 年
昭和	5 年 23 年 27 年 28 年 36 年 41 年 45 年 50 年 59 年
平成	3 年

表 3.2 5 万分の 1 地形図「鶴来」の測図、修整年

旧版地形図は、発行当時の都市形態や地形を現代に伝える貴重な資料である。地図は、地物の配置や地理的空間の状態や変化など、空間に関する事柄を視覚的に伝達することに優れているため、時系列に並べて観察することで、明治時代から現代社会へと至る過程を読み取ることもできる。国土地理院の地形図は、日本の国土を緯度経度で機械的に区切り、日本の国土全てを対象として製作されている。したがって全ての自治体が共通して有する資料と言える。しかし、旧版地形図を入手するためには国土地理院に対して謄本交付の申請が必要で、閲覧するためには、各地の地方測量部まで足を運ぶ必要がある。このように入手に煩雑さを要するため、一般的に触れる機械は少ない。

3.3 メディアの情報伝達特性

地域は、地形や住宅、道路といった地理的背景の上で、様々な出来事が積み重なり現在の地域を形成している。そのため、地域の記録である自治体史においては、地理的情報が重要な要素となる。しかし自治体史は主に言語メディアによって地域を記録、表現、蓄積している。必要に応じて図や表を用いてはいるが、文章が主体であるため、頭の中に地域のイメージを構築するのが難しい。その場所が地理的にどのような特徴を有するのか知るためには、その場所の地図を辰口町史内から探し出すか、他の地図を参照する必要がある。

ここで、自治体史における言語メディアの特性をまとめると、次のようになる。

利点

- ・ 詳細な意味を表現できる。
- ・ 情報の蓄積効率が低い。
- ・ 出来事の表現に優れる。

欠点

- ・ 一次元的な表現の制約を受ける。
- ・ 事象や物事を直感的に伝達しにくい。
- ・ 地理的な事柄を表現しにくい。

このように、言語メディアは詳細記述力と情報蓄積効率が低いため、辰口町史は高い記述性と網羅性を有することができる。しかし、部分を読み進めることによって徐々に全体像をつかむというようなボトムアップ型の理解形態をとるため、大まかな概要を把握するためにもかなりの時間を費やさなければならないことが多い。また直感性に欠けるため、地理的な事柄を伝えることが難しい。例えば、駅から目的地までの経路を言葉で説明するのと経路を線で示した地図で説明するのとでは、明らかに後者が有効であろう。この、言語メディアの直感性の低さも、辰口町史が大衆性にやや欠ける原因の一つであろう。

続いて地形図について述べる。地形図は、地理的空間を記号・文字などによって表現した図的メディアである。地形図における図的メディアの特性をまとめると、次のようになる。

利点

- ・ 二次元の表現ができる。
- ・ 情報を直感的に伝達できる。
- ・ 概要を短時間で理解できる。

欠点

- ・ 物事を詳細に表現しにくい。
- ・ 出来事の表現が難しい。

図的メディアは情報の概要を直感的に把握することができるため、地図はある地域の地理的な状況を言語による表現よりも簡単に伝達できる。しかし、その地域で起こった出来事などの詳細を表現することは難しい。例えば、地形に変化が生じた場合、変化の生じる前後の地図を見れば、その変化自体は直感的に理解できるのだが、その変化が生じた理由など、背景にある具体的な出来事はわからない（図 3.3）。

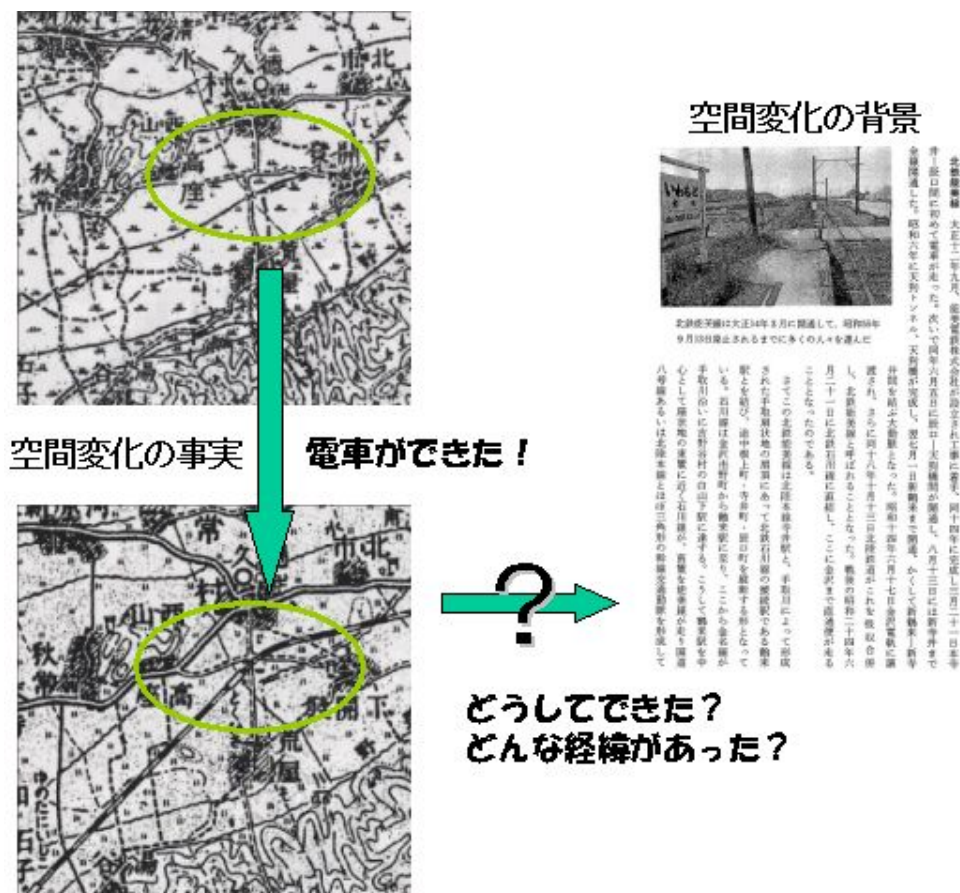


図 3.3 図的メディアの利点、欠点

人間は、「図を理解する形態である」[7]ため、その理解形態は次のように進む。

1. まず全体を一見したときに、概略の構成から理解が始まる。
2. 次第に部分の構造へと階層的に理解が進む。
3. その結果、部分の構造から要素までの理解が進む。

このように、全体像から徐々に詳細へと進むトップダウンの理解形態をとる。しかし、辰口町史は言語メディアであるため、文章を読み進めて徐々に全体像をつかむボトムアップ型の理解形態を必要とする。辰口町史は全5千頁以上に及ぶ資料であり、辰口町とはなんであるのか全体像を把握するのは容易ではない。一方図的メディアは、人間の理解形態に適したメディアではあるが、詳細の表現が難しいという欠点を持つため、地形図から得られる情報は限定したものにならざるを得ない。このように言語メディアと図的メディアはそれぞれ情報伝達特性に制限があるため、単一メディアによる情報伝達には限界がある。そのため次章では、言語メディアと図的メディアの利点を生かし、相互補完することにより理解効率の向上を図る。

第 4 章

ウェブサイトの構築

4.1 地域の知識の伝承に向けての課題と解決策

前章までに述べたように、地域の知識の表出が少なく、ともすると埋没してしまうという問題は全国大多数の自治体に見られる。この問題に対し、歴史や地理などに関して特定の興味を持たない場合であっても地域に関する様々な知識を得ることができるようなウェブサイトを構築することで地域の知識の伝承への可能性を探りたい。

そこで本研究では、ウェブサイト「Web 辰口町史」（図 4.1）を構築した。

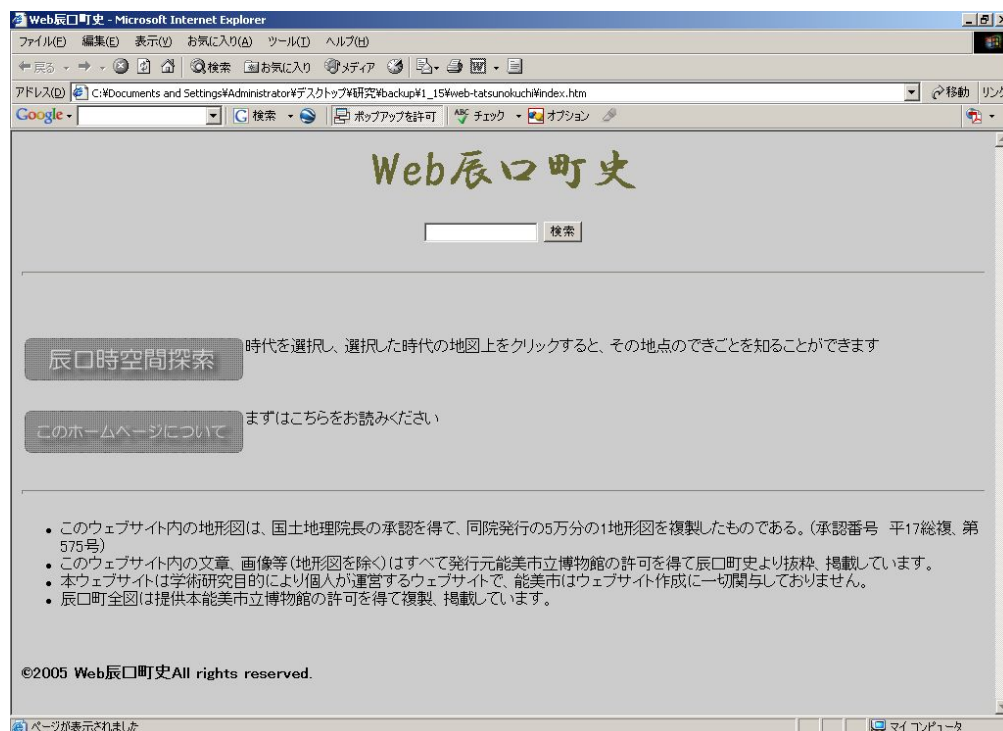


図 4.1 Web 辰口町史トップページ

なお、Web 辰口町史はユーザーを「辰口町域の人々」と想定している。何故かという
と、第 1 章で述べているように、本研究は、地域の人々一人一人が自分の地域はどの
ような特徴をもつのか、どのような成り立ちで現代にいたるのかを問い直すことが重
要であるという立場をとる。したがって、観光情報のような外への発信ではなく、地
域の出来事を地域の人々へと伝承する内への発信が目的である。

ここまでの既存事例やメディアの情報伝達特性の検討で、地域の知識の伝承に必要
なものは何かを考えてきた。その検討を踏まえて、解決すべき課題をまとめると以下
のようになる。

- (1) 物理的な本がもつ、目次を見て読む個所を選択し、本文を読むという構造では、
特定の興味を持つ場合でなければ気軽に読みづらい。
- (2) 地図はその場所の出来事などを詳細に表現することが難しい。
- (3) 歴史叙史的な辰口町史において、時間軸をどのように扱うか。
- (4) 地域によって文化や歴史の知名度に格差が存在する。
- (5) 地理的な事柄を文章で表すと、イメージがわきづらい。
- (6) 辰口町史を主体として用いる場合、静態的な記述などに起因する大衆性の低さ
をいかに緩和させるか。
- (7) 調べたい事柄が明確に存在する場合の対処。

次節では、これらの課題に対する解決策として構築した「辰口町時空間探索」の機能、
特徴について具体的に述べる。

4.2 課題を解決するための機能

辰口町時空間探索（図 4.2）は上述の課題の解決を目的に構築した。ここでは上記
の課題解決のための各機能について具体的に述べる。

・地形図から辰口町史へとたどる

第 3 章で示したように辰口町史は、行政、経済、くらし、教育など、町のあらゆる
出来事が系統的に記録されている。そのため、読み進めることは容易ではない。2.2.2

で見られた事例では、目次の一覧から本文へとたどることによってアクセス性は向上しているが、基本的に本の持つ構造のままである。

この問題に対しては前章で述べたメディアの伝達特性が応用できると考える。言語メディアは読み進めることで徐々に全体を把握するといったボトムアップ型の理解形態を必要とする。一方の図的メディアは、表現している情報の内容概略を直感的に把握することができる。そこで、トップ画面（図 4.2）には地形図を表示し、地形図上をクリックすることでその地点の出来事へとたどる形を実現させた。こうすることで、より直感的な理解を促す図的メディアから徐々に詳細を知るというトップダウン型の理解形態を可能とした。また、図的メディアの欠点として、詳細な意味を表現することが難しいということが挙げられたが、地図上をクリックすることによって詳細な記述が可能な言語メディアへとたどることによって相互補完できると考える。ここで次に問題となるのは、辰口町史をどのように分類するかである。

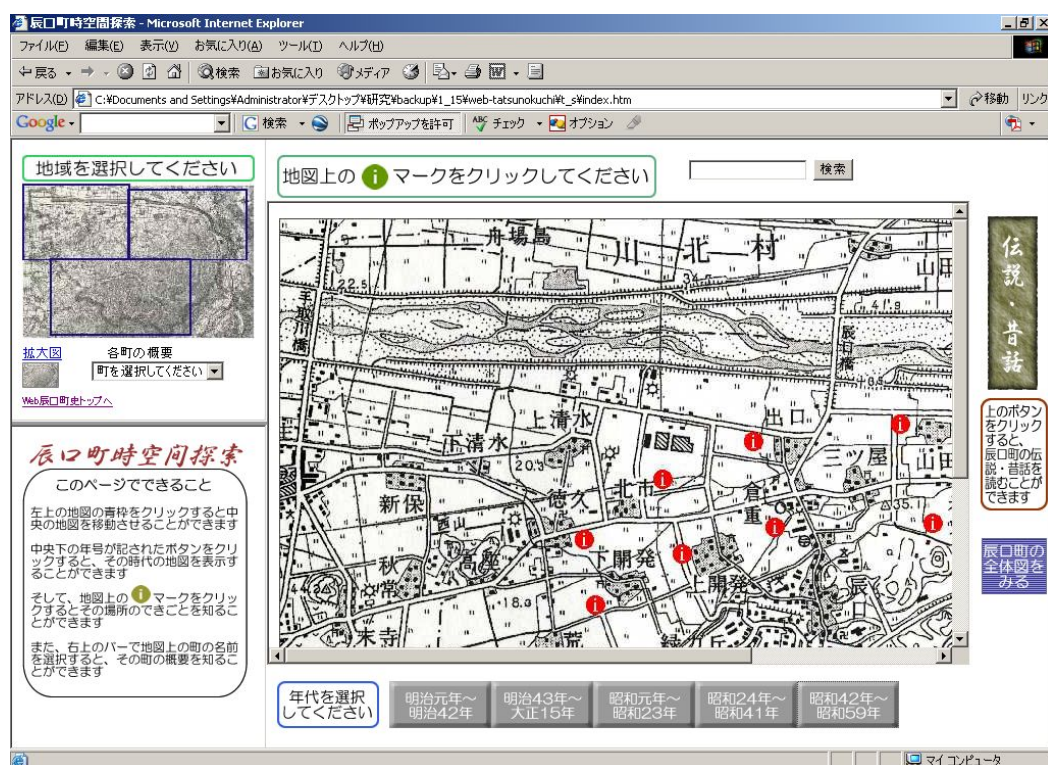


図 4.2 辰口町時空間探索トップページ

・辰口町史の分類基準を設定する

次に、明確に調べたい事柄がない場合への対処が必要である。この問題に対しては、辰口町内の自治区ごとに町史を分類することで対応する。歴史や文化に対する興味は誰もが有するわけではないが、出身地や居住地は誰もが有する。自治区は地域の最も小さく基本的な単位と思われ、そこに生まれた、または住んでいる場合、その場所に関する関心は誰しも少なからず有すると考える。辰口町内には現在 38 の自治区が存在するため、辰口町史から該当する自治区に関する事柄を探し出し、整理することにする。

ここで、整理の仕方に対して基準を設ける必要がある。仮に、辰口町史から該当する自治区に関する事柄を集めて、行政、経済、くらしなどの辰口町史が有する構造でまとめたとすれば、単位が地方自治体から自治区へと変わっただけで、結局行政や経済などに関する特定の興味がなければ読み進めづらくなるということが考えられる。ここでは辰口町史内の年表と旧版地形図を用いて対策を考える。旧版地形図「鶴来」の修整年（表 3.2）を見ると、明治 42 年、大正 15 年、昭和 23 年、昭和 41 年、昭和 59 年を選ぶと約 20 年間隔で並べることができる。この 5 枚の地形図を、切り替え表示できる形を実現した（図 4.3）。年表は地形図の年代間隔にあわせて、明治元年から昭和 59 年までを用いる（表 4.1）。年表には辰口町全体の動きが記録されているため、その中から各自地区に関する記載を抜き出し、各自地区固有の年表を作成した（図 4.4）。同時に地域全体の流れもわかるように辰口町全体の動きも同時に閲覧できる形にした。そしてその年表内の記載をクリックすることで、その内容の詳細を記したファイルへと移動できるようにした。地形図各年代の年表表示範囲は表 4.1 のとおりである。これは、地形図の表示年代を切り替えた際に視覚的に地表の変化を感じとり、さらにその変化した地図をクリックして年表を表示することでその変化の過程にある時代背景を伝えることができると考えたためである。



図 4.3 地形図の表示切り替え

表示地形図	明治 42 年	大正 15 年	昭和 23 年	昭和 41 年	昭和 59 年
表示年表	明治元年～ 明治 42 年	明治 43 年～ 大正 15 年	昭和元年～ 昭和 23 年	昭和 24 年～ 昭和 41 年	昭和 42 年～ 昭和 59 年

表 4.1 表示地形図と表示年表の対応

年号	月・日	宮竹のできごと	宮口町
明治43	2・11		宮口製紙局が電燈取付
	7・11		山上村農園児童学校開校
	7・11		山上村農民地権者会設立
明治44	8・16		宮口製紙局に製紙工場
	9・4	宮竹製紙株式会社が林道に製紙工場を創設	
明治45	4・22		山上村製紙株式会社が製紙工場を創設
大正元	7		宮口製紙局が製紙工場を創設
大正2	2・27		山上村製紙局が製紙工場を創設
	10		山上村製紙局が製紙工場を創設
大正3	9		宮口製紙局が製紙工場を創設
			宮口製紙局が製紙工場を創設
大正4	4・1		山上村製紙局が製紙工場を創設
大正5	2・26		山上村製紙局が製紙工場を創設
	2・29		山上村製紙局が製紙工場を創設
	9・29		山上村製紙局が製紙工場を創設
	11・8	宮竹小学校は校数を増設	山上村製紙局が製紙工場を創設
大正6			宮竹小学校は校数を増設
大正7	2・15	宮竹小学校校友会は正林寺まで死亡会員の追悼法要を行う	宮竹小学校は校数を増設
	4・1		宮竹小学校は校数を増設
	8・9		宮竹小学校は校数を増設
	9・30	宮竹の山上第一産業組合、村会館に山上産業組合を設立	宮竹小学校は校数を増設
			大正六〜七、山上村は重要な全盛期
大正8	4・2	宮竹の山上第一産業組合、村会館に山上産業組合を設立	宮竹小学校は校数を増設
	12		山上村三ヶ村組合が合併して宮竹町となる
大正9	8・4		宮竹町は合併して宮竹町となる
大正10	4・2	農業補習学校を過半数とし、宮竹・宮口の二校とする	宮竹町は合併して宮竹町となる
大正11			宮竹町は合併して宮竹町となる
大正12	2・29		宮竹町は合併して宮竹町となる
	7・6		宮竹町は合併して宮竹町となる
	8・10	宮竹小学校は日吉村で一週間、各宿舎に宿舎を設ける	宮竹町は合併して宮竹町となる
大正13			宮竹町は合併して宮竹町となる
大正14	7・11		宮竹町は合併して宮竹町となる

図 4.4 各自治区の年表

・自治区個別の概要をまとめる

ここまで述べてきたように、地域によって歴史や文化が表出した地域と表出する機

会が少ない地域が存在する。それは辰口町内の自治区にも当てはまる。例えば年表においても大字「辰口」に関する記載は多く、地形図の各年代それぞれに存在する。しかし年表に登場する回数が少ない自治区もあり、本研究で用いている、年表の記載内容を自治区ごとに分類する、という手法では、各年代の地形図上の全自治区に対して出来事を示すことができない。そこで、各自治区の概要を示したページを作成した(図 4.5)。

ここでの記述は主に辰口町史第 5 巻集落編より掲載している。第 5 巻は辰口町内各自地区の地誌となっており、若干のちがいはあるが、景観、沿革、生活に関して各自自治区ごとにまとめられている。自分の住む場所では過去にどのような出来事が起こり、どのように移り変わってきたのか、地名の由来は何なのかということは地域史料を調べる以外に知ることのできる機会が少ないと思えるため、ここでは基本的に沿革の部分を用いた。景観に関しては、第 3 章で述べたように言語メディアでは地理的な事柄を表現しにくいため、かわりに該当地域周辺の地形図を用いた。沿革の部分でも集落の位置関係などについて記載されている場合が多いため、その際すぐに参照できるという点でも有効に働くのではないかと考える。またこの地図は、マウスのカーソルを年号の上に乗せるだけで地図画像が変化する形にしている(図 4.6)。



図 4.5 各集落の概要



図 4.6 自治区周辺の地理的変遷

・地理空間に関する記述は地図を参照可能にする

地域は、地形や道路、住宅地、商業地などを含む地理的空間の中で、様々な出来事が積み重なり現在にいたる。そのため、辰口町史においては、自治区名、山や川などの地名、施設名など地理的空間を表す単語が多く見られる。文章を読んでいる際、これら地理的空間をすぐに参照できれば地域のイメージを形成するための手助けとなるのではないかと考える。そこで、文章中に見られる地名や施設、地形の名称などにリンクを張り、その名称を地図によってすぐに参照できるようにした（図 4.7）。



図 4.7 文章から地図の参照

・昔話、航空写真の利用

3.1 で述べたように、辰口町史は資料の網羅的な掲載と科学的な分析による記録物としての価値が非常に高い。だが、それゆえに記述が静態的で、一般向けとしての大衆性といった意味合いは薄いと考えられる。辰口町史第1巻自然民俗言語編には、口頭伝承として伝説・昔話が掲載されている。伝説・昔話は口語で記述されたものが多く、ものがたり形式なので歴史叙述よりも読みやすい。そこでウェブサイトで大衆性を付加する意味合いで、この伝説・昔話を自治区ごとに分類し、地図上に一覧表示した（図4.8）。

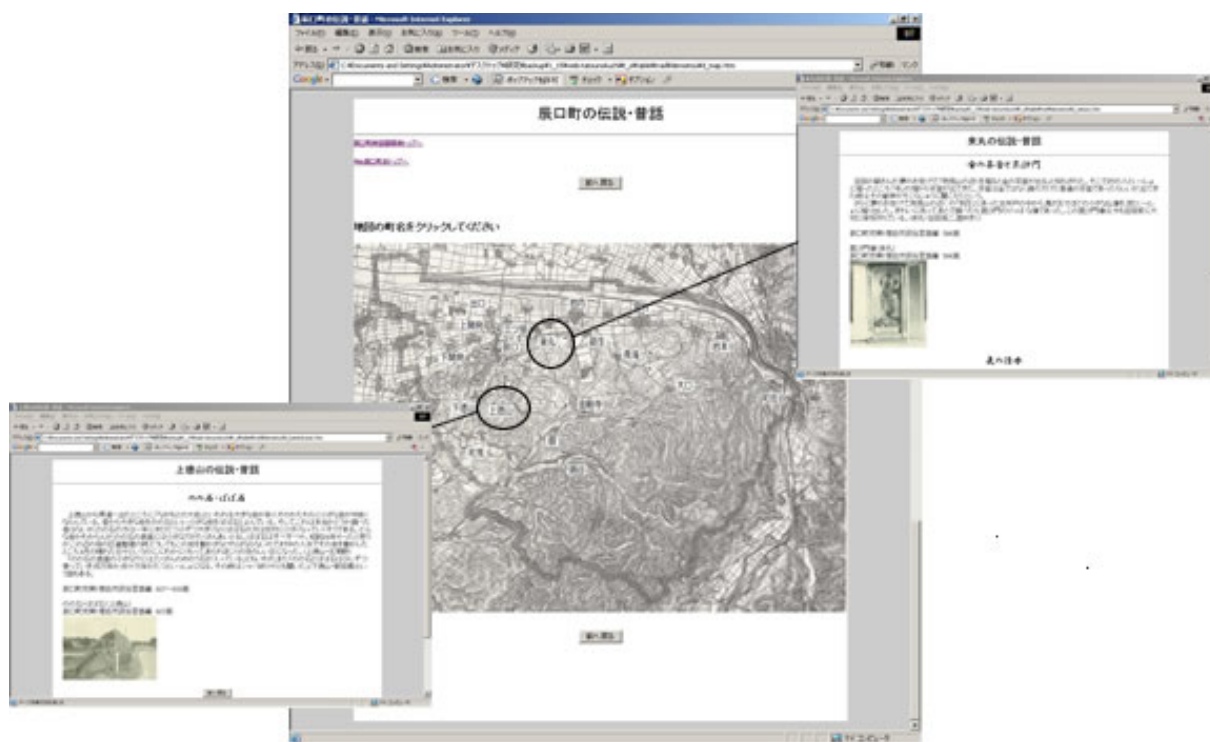


図 4.8 伝説・昔話の一覧地図

辰口町史第6巻には巻頭に航空写真が掲載されている。おそらく大部分の人は、自分の地域の上空からの眺めを見る機会はないのではないかとと思われる。地上を歩いていると、辰口町域がどのような地形や自然環境であるのかということに気をつける機会は少ない。航空写真のような上空からの視点で地域を眺めることで、地域の全体像がよりはっきりと浮かび上がるのではないかと考え、地図上からその上空からの眺めを表示することができる地図を作成した（図4.9）。

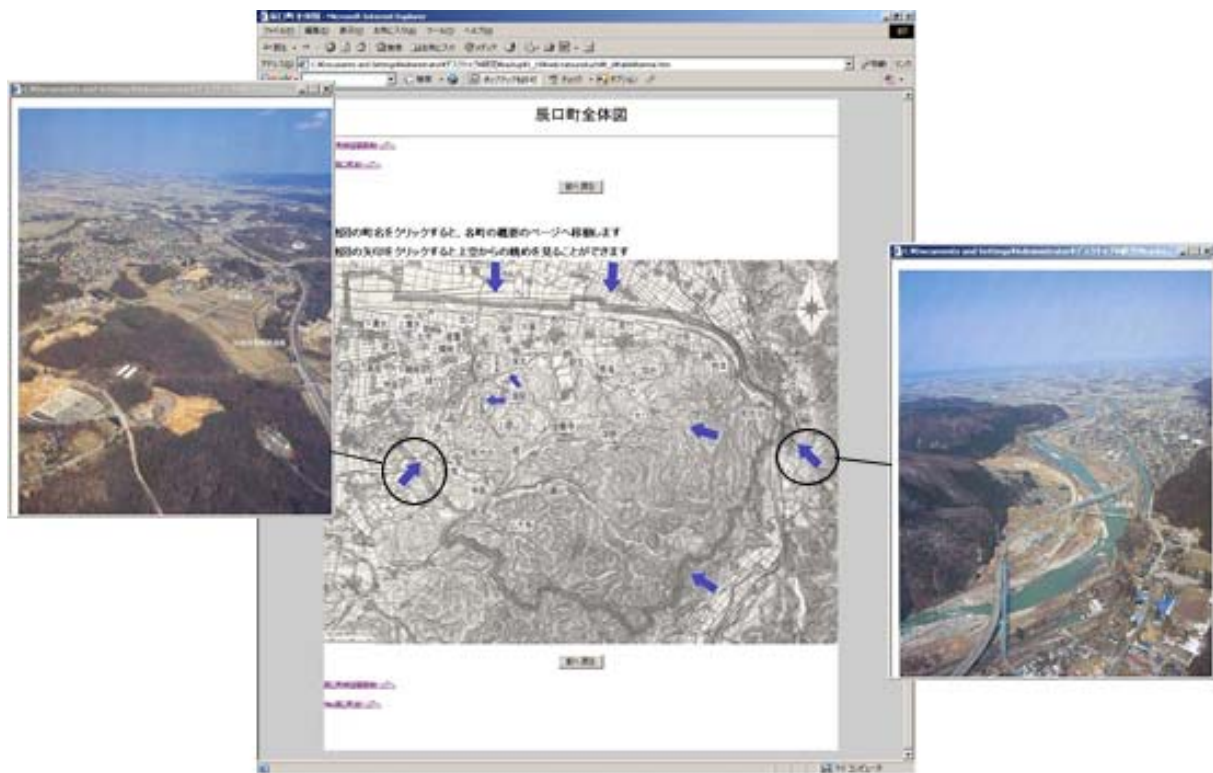


図 4.9 辰口町の全体図

・ 検索機能の付加

本研究では対象を「辰口町域の人々」と想定して、歴史や文化について特定の調べたい事柄を持たない人でも読み進めることが可能なウェブサイトを目指している。だが、この場合目次が地図に置き換わっているため、調べたい事柄が現れた場合、その事柄にたどり着くことが困難である。そこでウェブサイト内の全文検索機能を追加した。Web辰口町史トップ（図 4.1）と辰口町時空間探索トップ（図 4.2）からキーワード検索をかけることができる。

・ 操作性に対する留意

辰口町域の人々全てというのであれば、当然パソコンを使い慣れていない人や、まったく使用したことがない人も含まれるであろう。事例 2.2.3 における WebGIS は、レイヤの選択、地図の拡大・縮小、写真やコメントの入力など、操作がやや煩雑と思われる。そこで、トップページ（図 4.2）はスクロール不要のサイズに収め、操作を促す注意書きを目立つ形で表示している。

第 5 章

評価と考察

5.1 評価の方法

ここでは、前章で構築したウェブサイトの有効性を評価する。評価方法は、博物館や図書館などの施設関係者や一般市民の方に集合いただき、ウェブサイト構築の目的を説明した上でデモンストレーションを示しながら、各機能、特徴について自由に意見を出していただく聞き取り調査形式とした。当日の音声は、協力者の了承を得た上でボイスレコーダーに録音した。不特定多数のアンケートによる評価等も考えられるが、その場合回答者が単独でウェブサイトにアクセスして回答を考える形になるため、ウェブサイト構築の意図や機能の全てを把握できない可能性がある。聞き取り調査であれば、機能と構築意図を作者が示しながら進めることができるため、その危険は回避できる。また、多数が集合して意見を出す形なので、他の人の意見を聞くことであらたな意見がひらめくということも考えられ、より多様な意見を集めることができると考えた。

2006 年 1 月 19 日（木）15 時より、能美市立博物館にて約 2 時間にわたって聞き取り調査を行った。集合いただいたのは、能美市立博物館職員 4 名、(内 3 名学芸員)、能美市立図書館職員（司書）1 名、能美市生涯学習課（辰口地区公民館）1 名、市民の方（能美郷土史の会）1 名の計 7 名である。全員が現在辰口町在住で、そのうち 4 名は出身も辰口町である。今回の聞き取り調査では、協力者全員が事前に「Web 辰口町史」を閲覧している。また、能美市立浜小学校教頭（社会科教諭）（出身・現住所ともに寺井町）には、当日参加が困難であったため、事後アンケートにご回答いただいた。

5.2 評価の結果と考察

本節では、聞き取り調査で得られた意見を示す。そしてそれらをもとに考察を加え、今後の発展への道筋を探る。

地形図から辰口町史へとたどることに関して

- ・ 最初に地図が表示されて、地図をクリックしながら読み進められるのは良い。
- ・ 硬さがなくなり、親しみやすくなった。
- ・ 地域誌に手軽に入ることができる。
- ・ 地形、地物の変化も見ることができるので、興味が広がる。
- ・ 自治体史をウェブ公開した既存のものは、目録を一覧表示してそこから選択するものが多い。これだと歴史の専門家ならいいのだが一般の人が見ても何をすればいいのか（どこから見ればいいのか）わからなくなる。その点 Web 辰口町史は入りやすい。

このような肯定的意見が多く聞かれた。しかし一方で次のような意見があった。

- ・ 地形図が見にくい。字が読みづらい。
- ・ 国土地理院の地形図の発行年代をもとに辰口町史をまとめているため、掲載できる年代が限られる。辰口町域の人々を対象とするのならば当然歴史研究者や古代に興味を持つ人も使用するため、考慮する必要がある。

そしてこのことに関して、「年表は古代のものがあるので、例えば地形図は現代のものをういて古代編とすればいいのではないか」という提案をいただいた。

自治区ごとに辰口町史を分類したことについて

- ・ 逆から（地図→文章）という発想がおもしろい。
- ・ 歴史や地域を学ぶ上できまりごとではなく、ちがった視点から見ると地域史もおもしろくなる。
- ・ 身の回りの一番小さな地域から調べていくことは地域を知る上で基本であるため、有効である。
- ・ 学校の先生や子供の調べ学習に有効である。

最初にまず見たいと思ったのはどのような事柄か

この質問に関しては、全員がまず自分の出身地・居住地についての内容を探したという結果であった。

自治区の概要のページについて

- ・ Web 辰口町史が対象とするのは辰口町域の人々であるのならば、このページは必須になる。

一方で、次のような意見があった。

- ・ 自治区の変遷の地図は、表示縮尺が大きすぎる。自分の住む地域の地形について知っている人にはいいが、まったくわからない人にはわかりづらい。もう少し広域を表示すべき。

年表に関して

- ・ 特に斬新ということはないのだが、他にこのような例は思いつかない。
- ・ 自治区によって掲載量に幅が出るのは仕方がない。

文章中の地名をクリックすることで地図を参照できることについて

- ・ 例えば「久常村」の範囲を調べたいと思っても町史から調べるのは非常に大変で、すぐに参照できるのは便利

航空写真を表示する機能について

- ・ クリックして写真が出るとインパクトがある。
- ・ これで地域に対する興味に直結するとはいえない。しかしあるに越したことはない。
- ・ 写真は地図以上に視覚的にわかりやすいので、写真を時系列で表示できればさらにいいだろう。

伝説・昔話について

- ・ もっとボタンわかりやすいところに置くべき。
- ・ 図書館で辰口町史を借りるのは年配の方が多い。一方昔話を借りるのは親子連れ

が多い。昔話の部分は絵や紙芝居など用いるのが良い。

操作性について

- ・ 操作しやすく、いろいろ操作しているうちに簡単に操作をおぼえることができる。
- ・ 地図が表示されて、クリックして進んでいけることが良い。

一方、次のような意見があった。

- ・ 地図表示を変更していると、現在表示している地図が何年のものがわからなくなる。
- ・ “Web 辰口町史トップへ” などのフォントが小さい。

全体を通しての意見

- ・ 全国 9 割以上の自治体が発行している自治体史を用いているので、ビジネスになる可能性がある。
- ・ ページの色やデザインなど、もっと幅広い年代をひきつけられるようなものが必要。
- ・ ウェブの利点である、情報を追加していける点や市民参加型の取り組みなどを生かすことで発展させることができる。
- ・ 「辰口町史と地形図のみを用いて、地域の知識の伝承を目指す」という制約の中で行ったのであれば今回のもので良い。だが、地域のためにということであれば事前に地域の要望を聞くべきである。

本研究では、ボトムアップ型の理解形態が必要な辰口町史を、地形図を用いることによってトップダウン型の理解形態へと逆転させた。その点に関しては肯定的な意見が多く聞かれた。しかし、地形図が見づらいという意見があった。これは、地形図は観光地図のようなわかりやすさよりも精密さが求められるメディアであることに起因すると考えられる。だが、その精密さゆえに過去の地域の姿を正確に表現することができる。地域の知識を人々に伝承するという視点に立つのならば、この精密さは貴重であり、地形図の拡大、縮小を可能にするなどの方法により改善方法をさぐるべきであろう。また今回本研究で用いた、地形図の発行年代を元にした資料分類では、明

治以前を扱うことができない。辰口町は遺跡の宝庫であり、地域の価値を掘り起こす意味でも、古代をいかに取り扱うかが重要な課題となる。

本研究では、自身の出身地や出生地は誰しも少なからず関心があるのではないかと考え、自治区ごとに辰口町史を分類した。このことは、今回の調査において協力者が最初にさがした情報は自身の居住地や出身地に関するものであることから有効に作用した。「身の回りの一番小さな地域から調べていくことは地域を知る上で基本である」という意見があり、小学校学習指導要領[8]においても、小学校3学年から始まる社会化の授業目標として、地域社会の一員としての自覚や地域社会に対する誇りと愛情を育てることなどがあげられており、その内容は、自分たちの住んでいる身近な地域の地形、土地利用、公共施設の働き、交通の様子などについての観察など、身近な地域を知るという意味合いのものが多くあげられているため、地域を知るための基本的単位として自治区による分類は有効であると思われる。

ここで問題になるのは、辰口町史の年表から各自治区の記載を分類すると、自治区によって記載量に格差がある点である。本研究では各自治区の概要を記したページを作成することで対処した。しかし本研究ではどの地域であろうとも固有の文化や風土が存在するという立場に立つため、Web 辰口町史の主体である地形図上においてその格差が現れてしまうことが問題であり、改善案を練る必要がある。

辰口町史のみを用いていることに関しては、対象世代についての問題がある。社会科教諭のアンケートに「小学生が活用する場合、操作性には問題はないが、漢字が読めないなど、表記などに課題がある。」とある。また辰口町史に関心をもつのは比較的高い世代に偏るという回答があり、昔話の部分などで紙芝居を用いるなど他の資料も有効活用すべきという意見があった。ここで留意する必要があるのは、表出機会の少ない地域の文化や伝統を伝えるということが主題であるということで、なりふり構わずわかりやすい物を追加すればいいということではない。辰口町史は、大衆性が高いとはいえないが、その豊富な記録は地域の知識の伝承という観点では貴重であるため、他の資料を用いる場合は注意が必要になる。

第 6 章

結論

6.1 まとめ

本研究では、全国どの地域にもその地域が積み重ねた歴史や風土が存在するにもかかわらず、地域によってその歴史や風土の知名度や浸透具合に格差があることに疑問を呈したことに始まった。地方自治体にとって厳しい状況が散乱する現状において、自身の出身地や居住地についてあらためて問い直すことが求められる時代であるのだが、自身の出身地に関してわかっていそうでわかっていないというようなことはよく見られることである。このような現状に対して、自治体史と地形図を用い、石川県辰口町を対象としてウェブサイトを構築することで、地域の知識の伝承に一役買おうとができないだろうか考えた。

事例を調査すると、次のようなことが明らかになった。

- (1) 対象が、すでにある程度知名度を有する地域や財である場合が多い。
- (2) 図書を電子化したものは、図書のもつ特徴をそのまま踏襲したものが多い。
- (3) 地図を用いると、地域を直感的にわかりやすく表現できるが、出来事を詳細に示すことができない。

つづいて今回用いる資料である自治体史と地形図を、言語メディア、図的メディアと捉えると、次のような特徴を有することがわかった。

- (1) 自治体史は、詳細から全体像へとボトムアップ的に理解が進む。
- (2) 地形図は、直感的な理解を可能とする。

人間は、図を理解する形態であり、その理解形態は、全体像から徐々に部分へとトップダウン的であるということに留意し、直感的な理解が可能な地図を主体として

徐々に辰口町史の詳細へと進むことを可能とするウェブサイトを構築した。

このウェブサイトの有効性を聞き取り調査により検証したところ、地形図を主体とした事に関して高い評価を得た。しかし、辰口町史と地形図のみを用いているため、対象世代に偏りが生じる可能性があるという問題が表出した。

6.2 今後の展望

科学技術の進歩により、かつては口頭により受け継がれてきた地域の知識が、いまや様々な加工を加え、インターネットで世界中へ発信することが可能となるまでに至った。近年地域の歴史や文化的資源が、様々なウェブサイトとして発信され始めた。このようなウェブサイトで地域の関心を集め、観光や商品販売などを通じて地域に地域外の資金を呼び込むという効果が期待される。

しかし地域の人々がその地域に対してあらためて関心を持ち、興味を持つことで、いつもはあたりまえの光景を少し違った視点で考える、博物館や図書館に足をはこび、さらに深く調べる、などの行動を通じて地域への愛着をさらに深めるといったことが根本的に重要であると考えます。本研究で構築した「Web 辰口町史」は、パソコンのディスプレイのみで町の全てを伝えるという主旨ではなく、なにかのきっかけで本ウェブサイトを開覧し、町への興味を生成する、あくまできっかけであればと考える。地域へと足をはこぶきっかけとなることが望まれる。

平成 17 年 1 月 31 日、「辰口町」「寺井町」「根上町」は閉町した。しかし今後の能美市としての発展のためにも、各町固有の特徴を知り、効果的に融合させることが求められる。そのため、今後は旧寺井町、旧根上町への拡張も含め、地域の人々にあらためて地域に対する関心を与えるきっかけとするには何が求められるのかをさらに考える必要がある。

謝辞

本研究を進めるにあたり、時に優しく、時に厳しく終始ご指導頂きました杉山公造教授に心より感謝申し上げます。

また、1年次にお世話になりました Ho Tu Bao 教授、河崎さおり助手、副テーマでご指導頂きました林幸雄助教授に心より感謝申し上げます。

そして知識構造論講座の皆様にも心より感謝申し上げます。

最後に、事前調査に快くお答えくださいました能美市役所の皆様、能美市立博物館の皆様、聞き取り調査にご協力くださいました皆様、どうもありがとうございました。

参 考 文 献

- [1] 笹羽晴夫 デジタルアーカイブの構築と運用 pp. 94, 2004.
- [2] 富山経済同友会 この指とまれ委員会 富山の魅力の自覚と発信のために
～「何もないちゃ」はもうやめて、遠慮なく自慢しよう～ pp. 7, 2004.
- [3] 独立行政法人中小企業基盤整備機構 地域ブランドマニュアル pp. 26,
2005.
- [4] 矢野桂司、中谷友樹、磯田弦、河角龍典、高橋裕、河原大、井上学、岩切
賢、塚本章宏（立命館大学地理学教室）、京都バーチャル時・空間、「東洋
学へのコンピュータ利用」研究セミナー論文集、pp. 47-56, 2004.
- [5] 関西経済連合会、情報通信委員会、関西デジタルアーカイブ研究会、関西デ
ジタルアーカイブ推進機構、pp. 10, 2005.
- [6] 安藤清、伊藤勝久、戸崎憲一、自治体史における地誌の特徴と課題、中村和
郎編、地理学「知」の冒険 pp. 108-122, 1997.
- [7] 村山正司、概念図の自動生成による文書内容の可視化、筑波大学大学院博
士課程工学研究科修士論文 pp. 4, 2000.
- [8] 文部科学省 新学習指導要領 小学校学習指導要領
http://www.mext.go.jp/b_menu/shuppan/sonota/990301.htm

付録

地域学習に役立てて

旧辰口 ネット 町史

先端大生が開発

「辰口町史」は、
むすめバチに寄主
ないかとみている。

web辰口町史の動
作を確認する古関さ
ん（能美市立博物館）

初刊行から約二十二年が経過し、一部入手困難な巻もある旧辰口町の町史が、北陸先端科学技術大学院大生によってデジタル化され、インターネット上で閲覧可能な全国的にも例の少ないネット町史に生まれ変わった。ウェブサイトの特性を生かし、地図上から各集落の情報にリンクする構造や検索機能を導入することで、地域学習に取り組み子どもでも簡単に目的の情報にたどり着ける扱いやすい操作を実現した。

この「web辰口町史」は、杉山公造教授の研究室に在籍する知識科学研究所二年の古関克也さん（さかき けんた）が修士論文として開発した。

今年三月で卒業の古関さんは、修士研究へ取り組むに当たって、研究生活を送った町への感謝の気持ちを込め、後世に残せるものを作りたいと考え、町史のデジタル化を修士論文に選んだ。

製作には計画から約十カ月を費やし、能美市立博物館や市役所へも聞き取り調査で足を運んだ。単に本を電子文書化し並べるだけでなく、普段

手に取る機会の少ない町史に、一人でも多くの住民が興味を抱けるようにするにはどうすればいいか工夫を重ねた。

本の町史は「自然・民俗・言語編」「近代編」「現代編」などのように時代やジャンルごとに巻が分かれている。「辰口町時空間探索」と名付けられた古関さんのネット町史では、住民が自分の住む地区や周辺の歴史から興味を広げていってもいいと、地図上をクリックすると各集落の年表や情報にリンクするといふ、ウェブサイトの特性を生かした構造を取り入れた。

明治元（一八六八）年から昭和五十九年までの地図を比較しながらそれぞれの時代に対応した町史にアクセスすることができ、これらの仕組みについては、能美市立博物館も「分厚く読みづらい町史だけに、パソコンで気軽に見れることで多くの人につながる」と歴史に興味を持ってもらえれば」と評価している。

付録1 2006年1月24日北国新聞朝刊

WEB版 旧辰口町史

北陸先端科学
技術大学院大

古関さんが開発

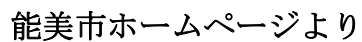
北陸先端科学技術大学院大学 市町村史ではあまり例がないという。郷土の文化、風土を継承していく手段として今後、注目を集めそうだ。

開発したのは知識科学研究科二年の古関克也さん（三〇）＝仙台市出身。事前調査から町史（二一六巻）

地図と歴史をうまく組み合わせたWEB辰口町史



に触れる機会が少ないことを知り、多くの人に郷土史を伝えるきっかけにと、修士論文のテーマに掲げた。昨年六月ごろからデータ収集に入り、博物館や市役所への聞き取り調査を開始。WEB版町史は「辰口時空間探索」と名付けられ、国土地理院が発行している地図を五つの年代（明治元～四十二年、四十二年～大正十五年、昭和元～二十三年、二十四～四十二年、四十二年～五十九年）に分け、各年代の地図が表示できるほか、地図上の町（集落）の名前を選択すると、その時の概要や変遷を知ることができる。また「伝説・昔話」コーナーもあり、児童らにも分かりやすい内容となっている。古関さんは「世代を超えた多くの人に見てもらい、まちの歴史に興味を持つきっかけになれば」と話す。指導に当たった杉山公造教授も「『地域の知識の伝承』として応用が広がるのではないかと目を細めている」。



http://www.city.nomi.ishikawa.jp/cgi-bin/odb-get.exe?WIT_template=AM040000